

氏名(本籍)	ばく 白	なむ 南	ぐおん 権	(韓国)
学位の種類	博士(教育学)			
学位記番号	博甲第1,178号			
学位授与年月日	平成6年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当			
審査研究科	教育学研究科			
学位論文題目	児童・生徒の学習メディア利用に対する「先有知覚」に関する研究			
主査	筑波大学教授	博士(教育学)	渡邊	光雄
副査	筑波大学助教授		川合	治男
副査	筑波大学教授	学術博士	菊地	正
副査	筑波大学助教授		中田	英雄

論 文 の 要 旨

1. 本論文の目的と研究方法

本論文は、学習メディア利用に対する「先有知覚」の働きを明らかにすることを目的とする。そのために、まず、先行研究の成果に基づき、「先有知覚」の働きについて、仮説、即ち、学習メディア利用に対する学習者の好み・難易感・学習期待感という「先有知覚」が、学習者の既有知識とSES(社会経済的地位)、教師の指導方法に規定されながら、学習の動機づけと成績に影響を及ぼす、という仮説を立て、次に、その仮説を実証するために、韓国小中学生対象調査結果に対する一対比較法分析と相関分析、教師自己評定結果の分析、韓国中学生対象CAI利用理科授業実験結果に対する形成要因分析と分散分析をそれぞれ行った。

2. 本論文の構成

本論文は、次のように序章から終章まで7つの章で構成される。

序章 本研究の目的と方法

第1章 教育メディア研究における「先有知覚」に関する研究の位置づけ

第2章 学習メディア利用に対する「先有知覚」の研究に関する理論的枠組み

第3章 学習メディア利用に対する「先有知覚」の働き

第4章 学習メディア利用に対する「先有知覚」の教科特性

第5章 学習メディア利用場面に対する「先有知覚」の動機づけ効果と学習効果

終章 本研究の成果と今後の課題

本論文は、目次4頁、本文168頁、参考文献一覧14頁、資料紹介62頁の合計248頁(1170字/頁)；

400字詰原稿用紙725枚相当)から成る。

3. 研究の成果

前述の「先有知覚」の働きに関する仮説(第1, 2章)に基づく韓国児童・生徒(392人)対象調査結果から, 学習メディア利用に対する好み・難易感・学習期待感という各々の「先有知覚」が, 性別・学年・SES・学業成績との関係で韓国児童・生徒においても日米児童・生徒と同様に学習メディア利用時の意識感覚として作用することが確認され(第3章)。その上で行われた韓国児童・生徒(181人)及び教師(8人)対象調査の結果からは, 国語, 算数・数学, 社会, 理科の各教科の特性に応じた児童・生徒の学習メディア利用経験の違いに基づくテレビ視聴及びコンピュータ利用に対する難易感とテレビ視聴及び読みに対する学習期待感が教科ごとに異なって現れることが分かった。又, 読みの指導の多い社会と国語において読みに対する学習期待感が高く現れ, テレビ視聴指導及びコンピュータ利用指導の多い理科においてテレビ及びコンピュータに対する利用し難さ感が低減し, 特にテレビ視聴に対する学習期待感が高まることが分かった(第4章)。さらに, 「先有知覚」の形成要因と影響関係を調べるための中学2年生(4学級182人)対象CAI利用理科授業実験の結果, 既有知識とSESが学習期待感という「先有知覚」に影響を与えることが分かり, 又, その「先有知覚」の高さが学習動機を高め, そのことが特に女子生徒, 場依存型認知様式生徒, 能力上位生徒に見られること, そして, その「先有知覚」の高さが学習成績を向上させ, そのことが特に男子生徒, 場独立認知様式生徒, 能力下位生徒に見られることが分かった(第5章)。

以上から, 教科特性に応じて現れる学習メディア利用に対する「先有知覚」が既有知識とSESそして教師の指導方法から規定されながら学習の動機づけと学習成績に影響を及ぼす, という本研究の仮説は実証され, 本論文の目的である学習メディア利用に対する「先有知覚」の働きを明示することができた。

審 査 の 要 旨

今日, 教育工学の分野では, 学習メディア利用においてテレビやコンピュータなどの学習メディアが学習成績に直接的に影響するという従来の考え方が修正され, 学習メディア利用に対して学習者が無意識的に培っている好み, 難易感, 学習期待感などの「先有知覚」が学習成績に影響するという新しい考え方が提起されている。この考え方に関しては, 現在, その「先有知覚」の存在の確認までは行われているが, 未だ, その「先有知覚」について, それを規定する要因, それによって規定される要因, それらの要因との関係は明らかにされていない。この状況の中で, 本論文が学習メディア利用に対する「先有知覚」について関連要因を挙げながらその働きを実際の学習活動との関係で実証的に示したことは, 本論文の独自性を示す。

学習メディア利用の効果がその利用自体に対する学習者の「先有知覚」に依存することが一般的に分かってはいても, その依存状態即ちその「先有知覚」の働きが具体的に分からなければ, 教師は学習者の学習メディア利用を効果的に指導できない。本論文は, 教師の効果的な学習メディア利用指導

に必要な情報を提供し得るという点で高く評価される。既に、本論文第3，4章の内容は日本教育工学会紀要と日本視聴覚教育学会紀要に掲載されているが，その点からも，本論文は学術的に貢献するものであるといえる。

なお，「先有知覚」の概念に関して，その心理学的なメカニズムが示されていないところから来る曖昧さに問題があるが，その曖昧さは，本論文が「先有知覚」の用語法を検討しながらも，その用語を好み・難易感・学習期待感をまとめて表現する言葉として用い，その用語の概念を心理学レベルで扱うことを意図しなかったために生じている。その概念の心理学的な解明は今後の課題として残されることになる。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。